

マーク、L. サヴィカスのキャリア理論（その1）

野淵 龍雄

On Mark, L. Savickas' Theory of Career (Part 1)

Tatsuo NOBUCHI

はじめに

筆者は、『前稿』で、キャリア理論史の観点から「発達理論の後に来るもの」の典型的な例としてラリー・コフランのナラティブ理論を紹介し、そのキャリア理論史上の意義を明らかにしてきた¹⁾。

これに引き続き、今回、マーク、L. サヴィカスのキャリア理論を取り挙げるのは以下のような理由による。

- ①サヴィカスが、キャリア理論史上で看過されてきた理論の「収斂化」(Convergence) — 事実上はキャリア理論の簡素化であり、研究者および実践家の間で共有できる比較的少数の共通概念を抽出しようとする試み — 問題に積極的に取り組み、その過程で個人のキャリア発達を評価する指標となる「アダプタビリティ」(Adaptability) 概念を抽出したこと。
- ②サヴィカスのキャリア理論は、発達理論またはその発展であるライフスパン・ライフスペースアプローチとナラティブ理論の中間に位置づけられると仮定できるから、そのキャリア理論の特質を知ることにより、かえって、発達理論とナラティブ理論の異同や相互連関等をより鮮明にすることができる、と期待されること。

なお、サヴィカスはノースイースタン・オハイオ大学行動科学部教授として、長年、キャリア理論の開発に取り組んできた人であり、1994年には、American Psychological Association からキャリアとパーソナリティに関する分野で優れた業績を挙げた人に贈られる「ジョン・ホランド賞」(John Holland Award) を受賞している。

I 「アダプタビリティ」概念の導入

サヴィカスは、「アダプタビリティ」は個人のキャリア発達の度合いを最もよく評価できる概念である、という²⁾。

実はスーパーも、成人期に至るまでのキャリア発達は基本的に「成熟」(Maturity) 概念によって評価できるとしながらも、成人期以降のそれは、予測しがたい環境の変化に対処する能力が格段に必要となることから、潜在的な能力・資質の完全な成長・発達過程を意味する「成熟」概念を用いることは適切ではないとし、これに替わる新たな概念として「アダプタビリティ」

(または「アダプテーション」:「調節力」の意味であるが、個人が環境の変化を自らの既存のスキーマに「同化」し、また環境の変化に有効に対処すべくスキーマ自体を新たに組み替えて「調節」する、等の能力を含む) 概念を使用した経緯がある³⁾。

サヴィカスの「アダプタビリティ」概念はスーパーからの援用であるが、サヴィカスに特有な点は、この概念を児童期、青年期を含む全ての発達段階に適用した点である。彼の所論によってこの間の事情を整理するとおおよそ以下ようになる。

- ①そもそも「成熟」という概念は、個人を取り巻く社会や文化の期待の表現である「発達課題」を基準にして評価された各発達段階の成長・発達のレベルを指すものであって、重点の置き所は「個人」ではなく「社会」にある。個人を社会に「合わせる」(to fit) ことが先立つため、個人の成熟レベルと社会の期待値との間に落差がある場合は、その個人のキャリア行動——キャリアの計画、探索、意志決定、等の行動——の実体は、その落差を埋め合わせるだけの行動になりかねない。このことに全く意味が無いわけではないが、キャリア発達の目標は個人の「自己自身の発達」(Self-Development) ——個人の可能性の実現、潜在的能力・資質の制約のない自在な開花——にあるから、そのような個人のキャリア発達を評価する基準としては、「成熟」概念は妥当であるとはいえない。
- ②「成熟」概念に替わる新たな概念として「アダプタビリティ」という概念が有力視される。「アダプタビリティ」は「調節力」であるが、これは社会の期待水準に合わせるという意味は持たず、むしろ、内に向かっては個人としての潜在的可能性を追求する力であり、外に向かってはその可能性の実現を期して「事態」(個人と環境、およびその間の関係) の変化を調節する能力である。
- ③「キャリア・アダプタビリティ」はキャリアに関する「計画力」(Planning)、「探索力」(Exploring)、「意思決定力」(Deciding) 等の諸能力から成る。このうち「計画力」は、それ自体は将来について実効性のある計画を立てる能力であるが、「将来を見通す力」(Time Perspective) が働く時、「探索力」や「意思決定力」の働きにプラスの効果をもたらすので、この能力は「キャリア・アダプタビリティ」の中核的能力であるといえる。
- ④「キャリア・アダプタビリティ」は、児童期から青年期、青年期から成人期へと移行するにつれて、一般にその能力のレベルは高くなると期待される。また各発達段階の「キャリア・アダプタビリティ」は、順次、次の発達段階で働く「キャリア・アダプタビリティ」のレディネスとなるなど、それ自体に発達の連続性と順次性が認められる⁴⁾。

II サヴィカスのキャリア理論の中間性

サヴィカスがコフランの著作、Career Counseling: A Narrative Approach (1997) に「序文」を寄せ、その中で、この書は“(真に) パーソナルな側面”からキャリア・カウンセリングの理論を構築した最初の書であると高く評価した時、彼は既にナラティブ理論を自らの理論的枠組みの中に深く組み込んでいた、と考えられる。また、ここにいう“(真に) パーソナルな側面”とはサヴィカスに特有の表現法であるが、それは自在にその可能性を開花、実現していく個人の「自己自身としての発達」を指していたのである⁵⁾。

サヴィカスがコフランのナラティブ理論を積極的に摂取していることは、彼が自らの理論的立場を説明する際、「スコアよりもストーリーを」(Stories rather than scores) 「マッチングよりも可能性の開発を」(Enable rather than fit) 等、コフランの独自の主張を取り入れる形でその論を展開していることから窺うことができる。これらの主張はキャリア・カウンセリン

グの在り方や進め方の指針として示されたものであるが、この面からみると、それぞれに次のような主張が含まれている。

「スコアよりもストーリーを」

- キャリアは事実上、ストーリーであり、そのストーリーの中にクライアントの生きる意味が凝縮されている。
- カウンセラーは、標準テストの得点結果によってのみクライアントを評価するのではなく、クライアントがキャリアを「語り」(storying), 「語り直す」(restorying) のを助けるようにしなければならない。

「マッチングよりも可能性の開発を」

- クライアントの特性と職業やキャリアが求める能力・適性等を「合わせる」(マッチング) よりもクライアントの可能性の開発に指導・助言の重点を置くこと。
- クライアントを「問題」(Problem), カウンセラーを「真理の体現者」(Master of Truth) とみるのは誤りであること⁶⁾。

一方、サヴィカスが「収斂」したと考えられる「キャリア・アダプタビリティ」概念は、実際には、多分にスーパーのキャリア発達理論を批判的に摂取する過程——事実上は、スーパーが成人期以降のキャリア発達を評価する指標として用いた「アダプタビリティ」概念を児童期と青年期にも適用できるとしたことを指す——で導き出されたものであり、むしろスーパーに負うところが大きい。そればかりではなく、スーパーの「成熟」概念に含まれていた「計画力」「探索力」「意思決定力」等の諸能力を「アダプタビリティ」概念を構成する基本要素としてそのまま活かしている点でもスーパーの影響を否定することはできない。

結局、サヴィカスのキャリア理論は、発達理論とナラティブ理論を合成したものであるといえよう。そこで、この両面性ということを実際立たせると、彼の理論は両理論の中間的性格——中間性——を帯びている、といえそうである。

中間的性格を有するということは、しかしながら、いずれか一方の観点——ここではナラティブ理論——からみると徹底さに欠けるということが起こりうる。実際、「アダプタビリティ」概念はもっぱら発達理論の用語で語られているため、ナラティブ理論からみてキャリア発達に不可欠な能力である「ストーリーを語り、語り直す力」「エンプロットメント」(Emplotment)——自らを対象に投企する力——、そして「意思決定の了解性」(Understanding of, or Practical Wisdom of Deciding) 等は「アダプタビリティ」概念には直ちに含まれてこないのである⁷⁾。

すると、「アダプタビリティ」概念は諸理論の「収斂」によって抽出された概念のようにみえたが、実際は、ナラティブ理論と発達理論間の収斂でさえなく、高高(青年期までの)発達理論と(成人期以降を含む)ライフスパン・ライフスペースアプローチ間というごく限られた範囲内での収斂であった、ということになる。従って、「収斂」の結果としての「アダプタビリティ」にはナラティブ理論に固有の「ストーリーを語り、語り直す力」等の要素は含まれていないとみなければならないのである。

本稿末に示した「対比表」にみるように、サヴィカスのキャリア理論を実際立たせているもうひとつの事実は、他ならぬ「発達」(Development)を「エシック」(Ethic)と捉えている点

であろう。このことが何を意味しているかについてはなお精査する余地があるが、現段階で捉えたところでは、そこには、以下のサヴィカスの言説にみるように、従前のキャリア発達理論を越えて、限りなくナラティブ理論へと接近し、これと一体化を図ろうとする意図が窺えるのである。

— 20世紀はキャリアがエシックであるような時代であり、人々の意識は人生上の様々な役割取得の在り方やライフスタイルに向かい、また職業上の経歴や地位等の移動に高い価値が置かれた。これに対して、21世紀は発達がエシックであるような時代であり、ここでは個人の「自己自身の発達」ないしは「自己完成に向けた」(Toward Self-Completion) 発達、従ってまた、個人が制約を受けることなくその可能性を自在に開花、実現していく生き方が、その人の精神的支柱となるような時代なのである(下線は筆者による)⁸⁾

注

- 1) 野淵龍雄(2004), ラリー・コフランのキャリア理論, 椋山女学園大学『人間関係学研究』第2号, 93-99. および, 野淵龍雄(2005), ラリー・コフランのキャリア理論(その2), 椋山女学園大学『人間関係学研究』第3号, 57-63.
- 2) Savickas, M. L. (1994), Convergence Prompts Theory Renovation, Research Unification, and Practice Coherence: In Savickas, M. L., Lent, R. W. (Eds.), Convergence in Career Theories, Consulting Psychologists Press, Inc., 235-257.
- 3) Super, D. E. and Knasel, E. G. (1981), Career Development in Adulthood: Some Theoretical Problems and a Possible Solution, British Journal of Guidance and Counselling, Vol. 9., No. 2., 194-201.
- ◎ スーパーの「アダプタビリティ」概念は、基本的にピアジェ, J. の「同化」と「調節」についての以下の考え方を適用し、これを統合したものとなっている。
 - 事物や人物を、主体固有の活動に合体する。つまり、外界を、すでにつくられた構造に「同化」(assimilation) する。
 - すでにつくられた構造を、受けた変化に応じて、再調整する、つまり、それを外部の対象に、「調節」(accommodation) する。
 - 人間の行為は、再調節と均衡化というこのたえず際限なくつづけられるメカニズムから成り立っている。
- ジャン・ピアジェ, 滝沢武久訳(1968, 1985), 思考の心理学, みすず書房, 13-14.
- ◎ スーパーの「成熟」についての理解の仕方は次の通りである。

Maturation implies a growth process, as ontogenetic pattern which, although highly dependent upon and modifiable by relevant environmental cues and pressures, unfolds according to a general blueprint which is common to all representative members of a species or definable subgroup (196).
- ◎ 本文中にあるスーパーのライフスパン・ライフスペースアプローチは、「生涯にわたって」(ライフスパン), 「家庭・学校・職場・地域」(ライフスペース) で個人が取得する様々な役割の変動とその意味を捉えようとするものである。
- 4) Savickas, M. L. (1997), Career Adaptability: An Integrative Construct for Life-Span, Life-Space Theory, The Career Development Quarterly, March, Vol. 45., 247-259.

- ◎ ここでサヴィカスは「キャリア・アダプタビリティ」を次のように定義している。

I have defined career adaptability as the readiness to cope with the predictable tasks of preparing for and participating in the work role and with the unpredictable adjustments prompted by changes in work and working conditions (254).

- ◎ 「アダプタビリティ」概念が「成熟」概念に替わるものであること、そこでは「キャリア成熟」の評価指標と同類の指標が用いられることについては次の説明を参照。

I also propose that adaptability replaces maturity as the cardinal dimension in the developmental perspective on adaptation. Moreover, adaptability should be conceptualized using developmental dimensions similar to those used to describe career maturity, namely, planning, exploring, and deciding (257).

- 5) Cochran, L. (1997), *Career Counseling: A Narrative Approach*, SAGE Publications, Inc., v-vii.

本文のⅡ「サヴィカスのキャリア理論の中間性」の中で、「この書は“(真に) パーソナルな側面”からキャリア・カウンセリングの理論を構築した最初の本である」という記述は、次のような原文からの意識を含んでいる。

Cochran is the first to elaborate in such fine detail a career counseling *theory* — one that invites counselors to make career interventions more personal (vii).

- 6) Savickas, M. L. (1993), *Career Counseling in the Postmodern Era*, *Journal of Cognitive Psychotherapy: International Quarterly*, Vol. 7., No. 3., 205-215.

- 7) サヴィカスは、「アダプタビリティ」(調節力)は発達理論とライフスパン・ライフスペースアプローチを構成する4つの「部分」(Segment) — 個人差, 発達, 自己, 文脈 — を接合する働らきがある, と主張する*。この時, 彼は「アダプタビリティ」概念を基本的に発達理論の立場から説明しているのであり, ナラティブ理論との関係において説明しているとはいえない。

*この点, サヴィカスは, スーパーの発達理論はその構成要素(部分)の観点からの個別説明の集積に止まっていると批判する — もちろん, スーパーは, これらは「自己概念」(Self Concept)のもとで統合されているというであろう(筆者による補足) —。これに対して, 「アダプタビリティ」概念は, 4つの構成要素間の掛け橋となり互いを接合する働らきがあるので, 個人のキャリア発達や行動を全体的, 連関的に説明することができるとしている。サヴィカスのキャリア理論では, 「アダプタビリティ」概念は「自己概念」に取って替わるものかどうか分明ではない。今後この点を明らかにしていくためにも, 「アダプタビリティ」概念が4つの構成要素間の掛け橋となるという点についてのサヴィカスの少し長い説明を以下に記しておきたい。

…… the construct of adaptation (or and adaptability) offers a potential bridge across the individual differences, developmental, self, and contextual segments in life-span, life-space theory. The four perspectives on careers bring into focus different aspects of adaptation. The individual differences perspective focuses on the objective status of an individual's adaptive skills and styles for fitting self into situation. The phenomenological perspective centers on the subjective goals of adaptation that a self constructs and values as she or he subjectively authors a life story and strives to become more complete and more fully engaged with the world. The developmental perspective highlights the functions and processes of adaptation across the life course.

And finally, the contextual perspective concentrates on the historical and cultural situation, with its attendant barriers and affordances, within which the individual must adapt and flourish. When career theorists and practitioners integrate these four perspectives on a client, theory and practice become more meaningful and compassionate because they deeply understand and comprehensively address what is at stake for the individual.

— Savickas, M. L. (1997), *ibid.*, 253. なお, () の挿入, および下線は筆者による。下線部分はスーパーの現象学的自己概念理論からの発想を適用したものであり, 純粋にナラティブ理論の観点からのものとはいえない。

8) Savickas, M. L. (1993), *ibid.*, 210.

ここでサヴィカスは, 20世紀はキャリア・エシックが支配的な時代であり, そこでは, 事実, 合理性, 論理実証主義, 地位の上昇等の価値観が重視されたのに対して, 21世紀はディベロップメント・エシックが優勢となり, ここでは, パースペクティブ, 解釈学, ポストモダニズム, 参加と貢献等に高い価値が置かれる, と指摘している。本文中にあるサヴィカスの“(真に) パーソナルな側面”もこのディベロップメント・エシックの一面を表わしたものと考えられる。

なお, 本文中に幾度か出現している“(制約なく) 自在にその可能性を開花, 実現していく個人”“自己自身としての発達”といった表現は, ディベロップメント・エシックの立場(ナラティブ理論)からのものとも, キャリア・エシックの立場(発達理論)からのものとも受け取ることができ, ここにもサヴィカス理論の両面性——中間性——が窺える。

参考文献

- Savickas, M. L., et. al. (1984) Time Perspective in Vocational Maturity and Career Decision Making, *Journal of Vocational Behavior*, 25., 258-269.
- Savickas, M. L. (1984), Career Maturity: The Construct and its Measurement, *The Vocational Guidance Quarterly*, Vol. 32., No. 4, 222-231.
- Savickas, M. L. (1985), Identity in Vocational Development, *Journal of Vocational Behavior*, 27., 329-337.
- Savickas, M. L. (1991), The Meaning of Work and Love: Career Issues and Interventions, *The Career Development Quarterly*, Vol. 39., 315-324.
- Savickas, M. L. (1991), Improving Career Time Perspective, In Brown, D., Brooks, L. (Eds.), *Career Counseling Techniques*, Allyn & Bacon, 236-248.
- Savickas, M. L. & Jarjoura, D. (1991), The Career Decision Scale as a Type Indicator, *Journal of Counseling Psychology*, Vol. 38., No. 1., 85-90.
- Savickas, M. L. (1995), Current Theoretical Issues in Vocational Psychology: Convergence, Divergence, and Schism, In Walsh, W. B., Osipow, S. H. (Eds.) (2nd ed.), *Handbook of Vocational Psychology*, Lawrence Erlbaum Associates, Publishers, 1-34.
- Savickas, M. L. (1996), A Framework for Linking Career Theory and Practice, In Savickas, M. L. & Walsh, W. B. (Eds.), *Handbook of Career Counseling Theory and Practice*, Davies-Black Publishing, 191-208.

- Savickas, M. L. (2002), Reinvigorating the Study of Careers, *Journal of Vocational Behavior*, 61., 381-385.
- Savickas, M. L., Briddick, W. C., and Watkins, Jr., C. E. (2002), The Relation of Career Maturity to Personality Type and Social Adjustment, *Journal of Career Assessment*, Vol. 10., No. 1., Feb., 24-41.
- Super, D. E., Savickas, M. L., and Super, C. M. (1996), The Life-Span, Life-Space Approach to Careers, In Brown, D. and Brooks, L. & Associates, *Career Choice and Development* (3rd. ed.), Jossey-Bass Publishers, 121-178.
- 仙崎武・野々村新・渡辺三枝子編著 (1991), 進路指導論, 福村出版, 全241頁.
- 仙崎武 監訳, 仙崎武・中西信男・野淵龍雄 共訳 (1978), 新時代のキャリアガイダンス, 実務教育出版, 全 322 頁.

対比表* キャリア発達に関するスーパー、コフラン、サヴィカスの見解

内容項目	スーパー, D. E.	コフラン, L.	サヴィカス, M. L.
エシック	キャリア・エシック**	ワーク・エシック, またはボケーション	ディベロップメント・エシック
「キャリア」の 概念・捉え方	人がその生涯を通して取得する様々な役割の結びつきとその連鎖としてのキャリア	キャリアの真髄はボケーションである	役割の連鎖としての、また生きる意味の表現としてのキャリア
キャリア発達を 評価する基準・ 指標	青年期までは「成熟」、 成人期以降は「アダプタビリティ」	語り、語り直す力 意思決定の了解性、 ストーリーとの調和、 パースペクティブ	すべての発達段階（生活段階）で働らく「アダプタビリティ」
キャリア理論の 特色	発達理論、ライフスパン・ライフスペースアプローチ	ナラティブ理論、パースン・フード、ライフ・テーマ、ボケーション（キャリア）へと順次結実していくストーリー	諸理論の収斂化、事実は発達理論とライフスパン・ライフスペースアプローチ間の収斂化
キャリア・カウ ンセリングの方 法	自己概念を発達させ、これを修正、調節するのを助けること	ストーリーとしてのキャリアを解釈するのを助けること、ストーリーの共著者であること	「アダプタビリティ」の発達、パーソナルな発達を助けること

* この「対比表」は、サヴィカスとスーパー、コフランのキャリア理論間の異同を明らかにするため、3人の理論の要点を整理し、対比させたものである。

** キャリア・エシックの呼称はサヴィカスのものである。スーパーは、この呼称を用いていない。